

# 今を生きる土木技術者や、 将来土木を目指す 若者たちへ



勝間 和代  
KATSUMA Kazuyo

## プロフィール

1968年東京都出身。早稲田大学ファイナンスMBA、慶応大学商学部卒業。当時最年少の19歳で会計士補の資格を取得、大学在学中から監査法人に勤務。アーサー・アンダーセン、マッキンゼー、JPモルガンを経て独立。現在、経済評論家、株式会社監査と分析取締役、国土交通省社会資本整備審議会委員、中央大学ビジネススクール客員教授として活躍中。ウォール・ストリート・ジャーナル「世界の最も注目すべき女性50人」選出。エイボン女性大賞（史上最年少）、第1回ベストマザー賞（経済部門）、世界経済フォーラム（ダボス会議）Young Global Leaders、少子化問題、若者の雇用問題、ワークライフバランス、ITを活用した個人の生産性向上など幅広い分野で発言をしており、ネットリテラシーの高い若年層を中心に高い支持を受けている。5年後になりたい自分になるための教育プログラムを勝間塾にて展開中。著作多数、著作累計発行部数は500万部を超える。

国土交通省の社会資本整備審議会の委員を務めはじめて、9年目になります。もともと私は通信業界での経験年数が長く、通信インフラはある程度理解していましたが、土木インフラについて詳しく触れたのはこの9年間で初めてです。土木に触れて、なんといっても衝撃を受けたのが「土木インフラの構築というのは、こんなに手間暇がかかり、そしてこんなにメンテナンスが必要なものか」ということでした。

私たちは道路や橋などの社会基盤を、当たり前のように享受しています。しかし、地球のそのままの環境では、とてもこのように快適に移動したり暮らしたりできるはずがありません。それを様々な形で設計を行い、施工を行おうやく今がある訳です。

よく「国の発展形態にどうして差があるのか」ということが議論になります。例えば、道路が整備されている国とそうでない国ではあまりにも生産性が違いすぎて、道路が整備されていない国は農業や工業を含めたどのような産業も国際社会では勝負にならないのです。これは日本国

内も同じで、インフラへのアクセスがいい地域とそうでない地域では、全く同じ能力の会社や人材が存在したとしても、活躍ができるかできないかについての条件が異なってしまいます。

私は今50歳で、かろうじて家の周りの砂利道が少しずつアスファルト道路になっていったのを覚えている世代です。しかし今を生きる多くの若者は、土木インフラは存在するのが当たり前で、そのありがたみを感じている人はいないと思います。まして、工事現場を見ると、土木現場のことを知らない多くの方は「うるさいな」とか「道路が遮断されて嫌だな」といった形で、自分の都合ばかり考えてしまうのが現状ではないでしょうか。

実際に全く土木インフラが整備されていない発展途上国などを訪れてみれば、いかに日本の土木インフラが素晴らしいかということは誰しもが簡単に知ることができるといえます。問題は何かと言うと、そのような事実をほとんどの人は知らないし、メディアも報道しないということです。

また、どれほど土木インフラを整備するのに労力がかか

り、お金がかかるかということについても多くの人は認識がありません。結果として、国内の世論も橋や道路を造るぐらいであれば、人にお金をかけろと言ったような指摘が出てきてしまうのです。ところが、土木インフラというのは国の礎であり、国の財産であり、国の成長を支える土台となっています。まさしく土木インフラは「縁の下の力持ち」なのです。

私は今、土木に従事している技術者やこれから従事したいと考えている方々が、もっともっと社会インフラの担い手として評価されてほしいと思っています。また土木技術者の方々からも、もっと様々な情報を発信してほしいなと思います。土木技術者の方々は寡黙な方が多く、あまりおしゃべりではありません。結果として、大した仕事をしていないのにおしゃべりなの方が、より重要な仕事をしているのにそれを周りに伝えていない人に比べて評価をされてしまうのです。是非とも、技術者の方々ももっと自分の仕事のことを周りにアピールしてください。そして、その面白さや楽しさを様々な雑談の席で友人や家族

に話をしてみてください。

土木技術者はどうしてもまだ男性中心ですが、もっとも女性との割合が増えることで、女性の中にもどんな仕事かということを知りたくする人が多くなり、今の10代やそれ以下の女性達にも将来土木技術者になるという選択肢が出てくるのではないかと思います。

以前、私は土木関係の学会で工事現場の看板をよりわかりやすくするよう提案したことがあります。通りかかる人達に「一体何の工事をしているのか」「自分たちにどう役に立つのか」をわかりやすくすることです。

これだけ手間暇がかかり、そしてこれだけの効果を私たちに与えてくれている土木の仕事が、もっともっと私や他の皆さんの積極的な発信によって、より高い関心と評価を持ってもらえることを望みます。

そして、今土木技術者として従事している方や、これから目指す方もぜひぜひどんどん色々な情報を発信してみてください。